

へるは、すこしまもごまの女をいへるよしなり、伊勢物語に、つとめてその家のめのこともいで、うきみるの浪によせられたるひろひて、家のうちにもてきぬとあるも、家につかふ女をいへり、をのこもたゞに男のことをいふには、たかきいやしきにかよはしていへれど、江家次第の二の巻、叙位の條に、大臣召男共五位藏人一人參入とあるを見れば、すこしまもごまの人ををのこどもといへるよしなり。

〔日本書紀神代〕凡八神矣、乾坤之道相參、而化所以成此男女オトコメナ。中略。伊弉諾尊伊弉冉尊オホノリノミ。中略。以礮馭盧

島爲國中之柱カミ。而陽神左旋、陰神右旋、分巡國柱同會オホノリノミ。二面時陰神先唱曰、意哉、遇可美少男焉オホノリノミ。男

此云鳥ト。陽神不悅曰、吾是男子、理當先唱、如何婦人反先言乎、事既不祥、宜以改旋。

〔古事記上〕爾其后オホノリノミ。須勢理毘賣命スセツリヒメノミ。神妻取大御酒、坏立依指舉而歌曰、夜知富許能、加微能美許登夜、阿賀

淤富久邇、奴斯許曾波、遠邇伊麻世、婆宇知微流、斯麻能佐岐邪岐、加岐微流、伊蘇能佐岐淤、知受和加久佐能都麻母多勢良米、阿波母與賣邇斯阿禮婆、那遠岐氏、遠波那志オホノリノミ。下略。

〔古事記傳十一〕遠邇伊麻世婆は男に坐者なり。中略。賣邇斯阿禮婆は女にし在者なり。

〔萬葉集六〕山上憶良沈痾之時歌一首

士也母空應有萬代爾語續可名者不立之而ツラコヤモムケニカタルベキナハタズシテ

〔書言字考節用集四〕武夫ムスラフ。健男ツヤムコ。增荒男マサリヲ

〔倭訓栞前編二十九〕ますらを 男子又丈夫をよめり、日本紀に見ゆ、優男也といへり、すらすり通

す、紀及萬葉集ともに丈夫をも訓せり、涅槃經は大夫とみゆ、萬葉集に益荒夫と書り、又ますらたけをとも見えたり、荒は武健をいふ、荒男等とのみも見えたり、手弱女にむかへたる稱謂也、正字通、丈夫尊稱之辭、倚仗義、近非盡長八尺而後謂之丈夫と見えたり。

〔日本書紀二〕此神オホノリノミ。進曰、豈唯經津主神獨爲丈夫、而吾非丈夫者哉、其辭氣慷慨オホノリノミ。下略。